

多治見市制70周年記念・多治見市無形文化財指定記念
多治見市文化財保護センター企画展



す い げ つ が ま
水月窯と

あ ら か わ と よ ぞ う
荒川豊蔵



平成22年7月12日(月)～12月10日(金)



水月窯は、国重要無形文化財（人間国宝）・荒川豊蔵氏（1894～1985）が、昭和21年に多治見市虎溪山町に開いた窯です。開窯から現在に至るまで、荒川豊蔵氏と豊蔵氏の二人のご子息が中心になり、全工程を手作りで行う伝統的窯業生産を守り続けてきました。水月窯は、平成22年2月、唯一の美濃窯伝統的窯業生産を行う窯であるとして、多治見市無形文化財に指定されました。このたび、水月窯の文化財指定および、本年が多治見市制70周年を迎えることを記念し、本展覧会を開催する運びとなりました。

荒川豊蔵氏は、昭和5年に可児市大萱牟田洞で菊絵の志野陶片を発見した後、昭和8年に牟田洞に窯を築き、志野、瀬戸黒、黄瀬戸など桃山陶の再現を試みました。その一方で、牟田洞の窯とは別に、美濃の伝統を生かしながらも、一般家庭向けの陶器を提供したいという思いで水月窯を築きます。水月窯の運営は、二人のご子息が中心になって行われ、豊蔵氏は、たまにやってきては、牟田洞の窯では焼くことのできない染付、粉引、赤絵などの作品を制作したということです。これまで一般的に、「志野を復興した荒川豊蔵」というイメージが強かったことと思いますが、本展でご紹介する水月窯の姿から、志野や桃山陶にとどまらず、美濃窯の伝統を技術的な面から追求し現在に伝え残した、荒川豊蔵氏の姿をご覧いただけることと思います。

本展開催にあたり、水月窯および財団法人豊蔵資料館には、多大なるご協力を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。



水月窯でロクロをひく荒川豊蔵
写真提供（財）豊蔵資料館

1 荒川豊蔵 誕生から志野復興まで



牟田洞の荒川豊蔵の穴窯 写真提供 (財) 豊蔵資料館

荒川豊蔵は、明治 27(1894) 年、現多治見市大畑町で農家を営む父 梅次郎・母 なべの長男として、母の実家、現多治見市高田町で誕生する。豊蔵は、明治 39(1906) 年、多治見尋常高等小学校高等科を卒業し、神戸や多治見、名古屋の陶磁器貿易商、陶磁器問屋などを転々とした後、自ら上絵磁器製作事業にも乗り出すも失敗。この間、明治 44(1911) 年に、叔父荒川虎次郎の次女志づと結婚。豊蔵 17 歳、志づ 13 歳であった。大正 2 (1913) 年、長男武夫誕生。

大正 11(1922) 年、心機一転、28 歳で画家への志を立て、東京に出る決心をするが、就職を断られ、東京行きを断念。京都の陶芸家・宮永東山に誘われ、東山の経営する陶磁器工場の工場長に就任する。京都では、仕事の合間に、古い焼き物を見て回る。後に豊蔵は、この頃に「一流のものを見聞きし、

その世界を知ったこと、これが知らず知らずに養い、目のたくわえとなった」^(注1)と述べている。大正 15 (1926) 年、次男達^{たつ}誕生。昭和 2(1927) 年、33 歳のときに、東山の工場で知り合った北大路魯山人に招かれ、北鎌倉の魯山人の窯・星岡窯^{ほしがおかがま}に移る。星岡窯では、窯場責任者を勤め、乾山風、九谷風などのやきものの作りのほか、魯山人の使う食材の買い付けなど、様々な仕事を行う。この星岡窯で、豊蔵は初めて自分専用のロクロを持ち、暇な時にロクロをひくようになる。昭和 3 (1928) 年には、魯山人とともに、朝鮮古窯跡の調査に行き、朝鮮半島南部の主立った窯を回るなどし、次第に古陶磁への素養を深めていく。

昭和 5 (1930) 年 4 月、豊蔵は魯山人とともに名古屋を訪れ、筍絵の志野茶碗を目にし、高台内側に飯粒大の赤い土がこびりついているのに気づく。そのころ、志野は瀬戸で焼いたというのが通説であったが、「瀬戸では赤い道具土など用いない。瀬戸のハマコロは白い。赤い土である限り、瀬戸ではないらしい。」^(注2)と考え、かつて叔父に連れられて大平^{おおひら}(現可児市)の窯跡を見た帰りに、織部の破片を拾ったことを思い出す。2日後、豊蔵は、従兄と一緒に大平に向かうが、織部の破片すらみつからず、地元の人に大萱にも窯跡があると教えられる。そのまま、大萱まで足を延ばし、一軒の家で窯跡の所在を尋ねると、その家の息子に牟田洞の窯跡に案内される。掘り始めてまもなく、志野の陶片を発見する。「てのひらに収まるほどの小片だが、ゆずはだで、火色の小さな筍が一本描いてある。なんと、一昨日丸文旅館(名古屋)で魯山人とながめた筍絵茶わんと同手ではないか。」「まぎれもない。やはり志野である。」^(注3)

この発見から 2 年間、豊蔵は美濃古窯跡群を精力的に調査する。大萱のほか、大平、浅間^{せんげん}(現可児市)、高根山、久尻の隠居山窯^{もとやしき}、元屋敷窯、大富(以上、現土岐市)、水上、猿爪^{ましづめ}、大川(以上、現瑞浪市)でも窯跡を見つけ、美濃古窯跡の分布が明らかになってくる。窯を探索しているうちに、豊蔵は、「志野を自分の手でいつかは作ろうという気が、きざしていた。」「発掘調査のほか、土も探し始めていた。」^(注4)自らの手による志野の再現へと心が向かっていく。

昭和 7(1932) 年の暮れ、豊蔵は鎌倉の星岡窯を退職し、久々利の民家を買入れ、大萱牟田洞に移築、陶房を作る。昭和 8 (1933) 年、豊蔵は長男武夫と、陶房の向かいに穴窯を築く。これは半地上式単室の窯で、考古学的には大窯^{おおがま}といわれる桃山期の窯の復元である。当時、「小名田の尼ヶ峰で室町末～桃山初期といわれる古窯跡」(おそらく尼ヶ根古窯跡)が発見され、焚口辺りの様子が多少わかったので、これを参考にして築窯した^(注5)。志野、黄瀬戸、瀬戸黒を手探りで作り始め、12 月に初窯を迎える。初窯は三晩四日焚いたが、途中で、豊蔵は意識を失い倒れる。父に代わり、長男武夫が窯を焚き続けるが、結果は失敗。初窯から 2 年間は試行錯誤で、昭和 10 年頃、ようやく人に見せられるものができるようになる。昭和 30(1955) 年、志野・瀬戸黒の技術で、国重要無形文化財技術保持者(人間国宝)に認定される。



荒川豊蔵作 志野花瓶

注 (1) ～ (4) 荒川豊蔵 1984『私の履歴書』『私の履歴書 文化人 8』日本経済新聞社

(5) 加納陽治 1973『美濃の陶片』徳間書店：198 頁

2 水月窯開窯



荒川豊蔵作 染付馬ノ絵初窯茶碗
昭和 30 年頃、登り窯を作り直した後の初窯の茶碗。銘「水月 初窯 無田洞人」



粉引茶碗「喝三日耳聾」
豊蔵がロクロをひき、永保寺・嶋田菊僊老師が文字を書いた作品。銘「斗」 (財) 豊蔵資料館蔵



荒川豊蔵作 赤絵秋草絵大鉢
銘「無田洞人 斗」(財) 豊蔵資料館蔵

昭和 21(1946) 年、豊蔵は、虎溪山永保寺から土地を借り受け、虎溪山町に新たな窯を築く。それは、志野や瀬戸黒を焼く牟田洞の窯とは別に、一般の家庭において日常生活で使われるための食器を作るという目的で、なおかつ、2 人の息子が中心となって運営するようにと考えての開窯だった。窯は、国宝・永保寺観音堂が別名水月場といわれることにちなみ、当時の永保寺老師・嶋田菊僊^{きくせん}によって「水月窯」と命名された。

昭和 21 年、家族が協力して整地を始め、モロ（作業小屋）や連房式登り窯などからなる美濃窯の伝統的な窯場を作りあげ、翌 22(1947) 年に初窯を迎える。息子の武夫・達兄弟とロクロの職人 1 名で、水月窯の運営が始められた。水月窯は、このときから現在に至るまで、全く方法を変えず、土作りから上絵付焼成にいたる全行程をいっさい手作りで行う美濃窯の伝統的窯業生産を守り続けている。

豊蔵の牟田洞の窯は、半地上式単室の穴窯（大窯）で、志野や瀬戸黒を焼成するための窯であった。それに対する水月の窯は、連房式登り窯という複数の焼成室が連なる地上式の窯で、江戸時代以降に美濃に広まる種類である。穴窯（大窯）と連房式登り窯とでは、焼成できるやきものの種類が異なり、水月の連房式登り窯では、粉引、染付、唐津風、赤絵素地が焼成された。

水月窯の運営は、豊蔵の 2 人の息子たちによって行われていたため、豊蔵は、たまに水月窯にやってくるのは、牟田洞の穴窯では焼成できない染付や赤絵などの作品を、気の向くままに作っていくというふうだったという。自らロクロをひいて作る場合もあり、職人がロクロびきした器の中に、気に入ったものがあるとそれに絵付けをする、また、新たに水月窯の製品として作られたものには見本として絵付けをするといったことも行ったという。

●水月窯の製品



粉引梅絵湯呑・汲み出し
開窯当時から、変わらず作り続けられている水月窯の定番製品



唐津風筍形刺身皿
昭和 40 ～ 50 年代の製品



色絵紅白梅絵急須・汲み出し



左：水月窯の染付製品

右：黄瀬戸輪花鉢

穴窯（大窯）で焼成された製品。
※ 穴窯は、水月開窯当初にはなく、牟田洞の窯と同形のものを、今から 30 年程前に作ったという。

3 水月窯の窯場と生産

水月窯は、美濃窯の伝統的な窯場構造を持っており、以下のような施設がある。

モロ（作業場）、エンゴロ（^{こうばち}匣鉢）小屋、薪置き場、連房式登り窯、穴窯（大窯）、^{きんがま}錦窯（上絵付用の窯）

さらに、モロの前の中庭は、焼成前の製品の天日干しや釉掛けを行う場や、土の水籤を行う沈殿槽が設置され、建物や窯と並ぶ重要な場となっている。

製造工程は、①製土（水籤）→②成形→③乾燥→（素焼き）→④下絵付→⑤^{せゆう}施釉→⑥本焼成→⑦上絵付（下の写真参照）という工程を取るが、水月窯は、開窯から今日まで、生産の全工程に一切の機械を入れず、手作りによる伝統的な陶器生産を行っている。伝統的な製法を守ってきたことについて、豊蔵の次男達は、「ガス窯と薪窯では、理由はうまく言えないが、同じ釉薬や土を使っても仕上がりが違う。米をガスや電気の釜で炊くのと、昔のようなくどや飯ごうで炊くのととは味がぜんぜん違う。それと同じこと。今では、新しいもの（道具）で作って、それを伝統という人もいるが、伝統というのはそういうもの。このやり方でやれと豊蔵に言われたわけではない。父は、何も言わなかった。」と述べる。

①製土（^{すいひ}水籤）



②成形（手口クロ成形
高台削り
ロクロ道具）



④下絵付



⑤施釉



⑥本焼成（連房式登り窯での焼成）



⑦上絵付（^{きんがま}錦窯での焼成）



写真①⑤は平成2年撮影、②④⑥⑦は平成22年撮影

〈参考文献〉

荒川豊蔵 1965 『荒川豊蔵作品展 大萱築窯三十周年記念』 株式会社丸栄

荒川豊蔵 1967 『志野』 朝日新聞社

荒川豊蔵監修 加納陽治編 1973 『美濃の陶片 甦える志野 黄瀬戸 織部』 徳間書店

荒川豊蔵 1984 「私の履歴書」『私の履歴書 文化人8』 日本経済新聞社

唐澤昌宏 2004 「荒川豊蔵と加藤唐九郎ー 桃山陶の美に魅せ

られた二人の軌跡ー」『没後20年 荒川豊蔵と加藤唐九郎』

展示図録 NHK 中部ブレイズ

（表紙写真）全て平成22年撮影

右上：穴窯焼成風景 瀬戸黒を引き出すところ

左下：モロ内部（ロクロ場）

右下：モロ（作業小屋）外観

※本文中、人物名の敬称は省略しました。

※本誌の編集は、春日美海が行いました。

※このパンフレットのカラー版がホームページよりダウンロードできます。



多治見市制70周年

多治見市文化財保護センター企画展

「水月窯と荒川豊蔵」

展示期間：平成22年7月12日（月）～12月10日（金）

開館時間：午前9時～午後5時 休館日：土・日・祝日 入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

電話 (0572)25-8633 FAX (0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>